

タッチングプールは、福島県内の潮だまりの環境を再現しています。この水槽の岩組は、いわき市内の岩場から直接型をとって作成しており、さらに波動装置や干満装置を設け、潮だまりに打ち寄せる波や潮の干満も再現しています。これにより、潮だまりの中の生物層を魚類や無脊椎動物だけではなく、海藻や海草を含め、忠実に再現することが可能になっています。

(3) 潮間帯の生き物たち

1年のうち、満潮でも1回しか海水につからないような高いところ「最満潮線」から、干潮で1回だけ干上がる低いところ「最干潮線」までを「潮間帯」と呼び、潮の干満の状態から上、中、下の3つに分けられています。また潮間帯より高く、海水が波しぶきとしてかかる範囲を潮上帯と呼びます。海岸で生活する動物たちは、潮上帯ではいうまでもなく、潮間帯でも干潮時には干上がって空気中に露出するため、冬の寒さや夏の暑さや強い日射とはげしい乾燥にあい、ときには雨水をあびることもある厳しくて変化の大きな環境で生活しています。

潮間帯での上下の潮位差は、太平洋岸では約2m前後ですが、その環境差は大きく、高山の植物のように、それぞれの環境に適応した動物が上下に分かれて生活する帯状分布が見られます。帯状分布の状態を最も個体数の多い種を代表として区別すると、次の4つに分けることができます。

① 潮上帯の代表種

岩の表面の小さなくぼみや割れ目のところに、殻高が10mm程度の小さな巻貝が群生しています。これは大多数がタマキビガイとアラレタマキビガイです。タマキビ類は、乾燥・温度に対する抵抗力の大きな海産動物の代表種です。



▲潮上帯の生き物(アラレタマキビガイ)



▲いわき市の磯

② 上部潮間帯の代表種

潮間帯の上部には直径が数mmで、灰白色の固い石灰質の殻につつまれ、殻口(かっこう)に4枚の板のふたを持ったイワフジツボが岩にびっしりと固着しています。



▲上部潮間帯の生き物(イワフジツボとオオイワフジツボ)

③ 中部潮間帯の代表種

ここには殻の直径が20mm前後になり、殻口がひし形のタテジマフジツボや、場所によっては殻口が五角形のシロスジフジツボが岩面をおおって固着しています。いずれもイワフジツボより成長速度が速く、固着面に対する競争では、イワフジツボより優位です。フジツボ類に続いて二枚貝のマガキが左殻で岩と相互に固着しているところもあります。



▲中部潮間帯の生き物(マガキ)

④ 下部潮間帯の代表種

ここでは殻の大きさが60mm前後になる黒色の二枚貝、ムラサキガイが体内から分泌した繊維状の足糸(そくし)で岩面や互いにかみ合って塊状になって付着しています。この塊の中には小型のゴカイ類、貝類、エビ・カニ類、ヒモムシ類などの動物が生息しており、潮間帯の中でも動物の種類が一番多いところ です。



▲下部潮間帯の生き物(ムラサキガイ)

※ 殻高=殻の大きさ